

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### 預金からみたマレー世界のイスラム銀行—ブルネイの特徴—

上原健太郎 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員)



首都バンドルスリブガワンにあるBIBD。前身のブルネイ・イスラム銀行とブルネイ・イスラム開発銀行が2005年に合併、翌06年に開業した(写真：筆者撮影)

ボルネオ島の北西部、マレーシアのサラワク州に囲まれているブルネイ・ダルサラーム国(以下、ブルネイ)は、日本の三重県程度の面積をもつ、人口が42万人ほど(2016年)の東南アジアの小国である。

ブルネイの国家理念は、マレー、イスラム教、君主制の3要素からなっており、社会生活では、イスラム教の教義に沿った経済活動が営まれるよう推奨されている。その取り組みの1つがイスラム銀行の設置・運営である。イスラム教の聖典クルアーンでは、リバー(いわゆる不当利得)が禁じられており、現代では主に利子を介さない銀行業の実現が求められてきた。ブルネイでは、1990年代以降、政府主導によってイスラム銀行の導入・展開が進められている。

現在、ブルネイのイスラム銀行部門の資産規模は、銀行部門全体の6割以上を占めている(17年時点)。同じマレー世界に位置するマレーシアのイスラム銀行資産の割合が全体の3割弱である(17年時点)点を踏まえると、ブルネイにおける存在感は大きい。

ブルネイのイスラム銀行部門を代表するのが、ブルネイ・ダルサラーム・イスラム銀行(Bank Islam Brunei Darussalam、以下BIBD)である。同行は、国内最大の資産規模を有しており、同国のイスラム銀行はもちろん、銀行業界全体を支えている。

ここでは、イスラム銀行が扱うサービスの中で、生活に最も身近な預金について紹介したい。西洋由来の銀行業において、預金者は債権者となり、銀行は債務者となる。銀行は預金者より借りた預金に利子を付けて返さなくてはならない。

利子を回避する必要があるイスラム銀行では、前近代からイスラム世界で用いられてきた契約手法をもとに、預金サービスを提供してきた。例えば、マレーシアのイスラム銀行では、消費貸借の契約手法をもとにした預金サービスが普及している。そこでは、預金の借主であるイスラム銀

行が、貸主の預金者に対して預金額と同額の返済を義務付けられている。さらに、この消費貸借式預金では多くの場合、イスラム銀行が預金者に対して、任意で贈与(通称ヒバ)分の金額を与えている。

一方、BIBDによる預金には、代理の契約手法が用いられている。この代理式預金では、預金者は銀行にお金を貸すのではなく、その運用を代わりに任せる。つまり、預金者は委任者となり、BIBDは代理人となって、預金者から預かった資産を代わりに運用するのである。預金者は5万ブルネイドル(約510万円相当)までの預金が保証され、加えて運用から得られた利潤の一部を享受できる仕組みとなっている。

イスラム銀行は共通して、地域の人々がイスラム教の教えに沿った日常生活を営めるよう、経済保障の役割を担うと言われている。一方で、そのような生活を達成するまでのプロセス、つまりサービスの提供の仕方については、地域ごとに異なり、一様ではない。ブルネイのBIBDは預金において、同じ東南アジア地域のマレーシアのものとは異なる契約手法を採用していた。今後、ブルネイのイスラム銀行業が他のマレー世界のそれと同様、イスラム教の教義を守りつつ、一方でどのような独自の特徴を示すのか、注目される。

#### イスラム銀行による預金取引の仕組み



※「預金者」「銀行」下の括弧は、預金取引でそれぞれが担う役割を示す。

#### < 筆者紹介 >

1990年、長崎県生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員。博士(地域研究、京都大学)。専門は、イスラム経済論、イスラム金融研究。特に、マレーシア、ブルネイ・ダルサラームでのイスラム経済をめぐる実践が、当該地域の経済政策や経済活動の中で、どのように位置づけられ、意義を持つのかについて研究している。